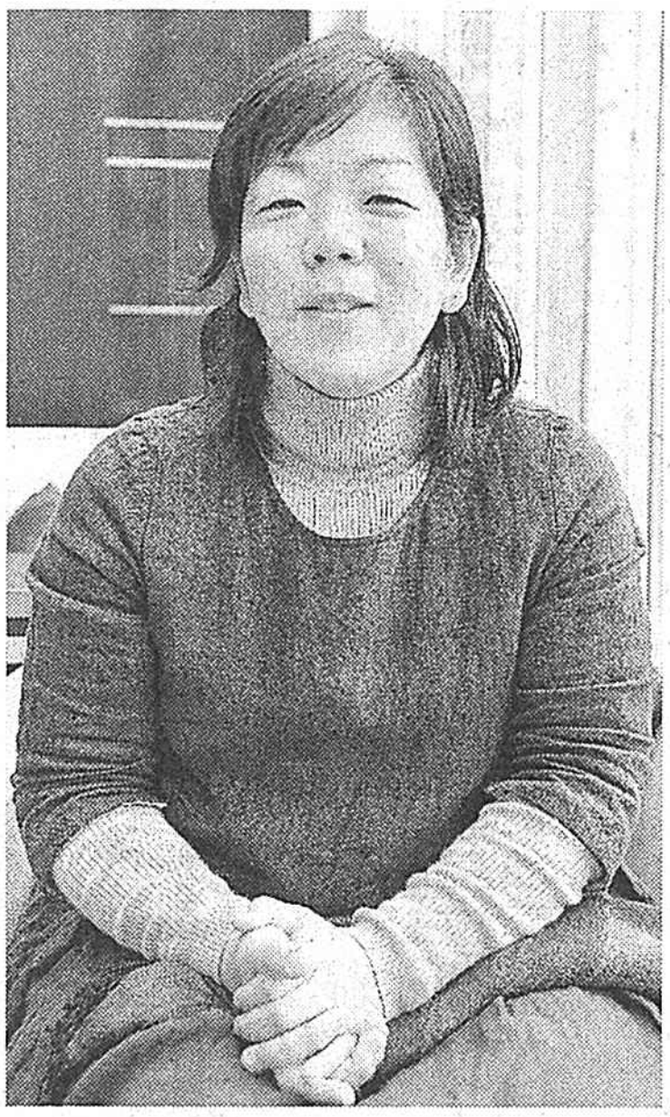
NZ地震 志継ぐ看護師

現地で遺族を支援した武田さん



発生6年 今は災害看護教える

日本人28人を含む185人が死亡したニュージーランド（NZ）南部地震から22日で6年を迎える。発生時にNZに滞在していた京都市の看護師武田未央さん(42)は、現地で遺族のサポートにあたった。海外で働くことを夢見ていた日本人看護師13人が犠牲になった地震。「被災したのは自分だったかもしれない」との思いを胸に遺族と交流を続けている。

(上)武田未央さん＝京都市南区
(下)鈴木陽子さんの写真を持つ父喜久男さん（右）と母千鶴子さん（左）＝名古屋市守山区

岡山県出身。発展途上国で活動してみたいと、2004年から国際医療NGO「AMDA」（岡山市）を通じて内戦の続くスリランカ、洪水に見舞われたタイなどに赴いた。

NZ南部地震の発生した11年2月22日は、北島最大の都市・オークランドにいた。半年間の短期語学留学のため、2月上旬に着いたばかり。AMDAの要請で同25日に被災地クライストチャーチに到着した。

倒壊したカンタベリーテレビ（CTV）ビルでは日本人28人を含む115人が亡くなった。語学研修中の若者も多かった。安否確認のため駆けつけた日本人家族たちはビルに近づけず、日本の外務省やNZ警察の説明を待つ毎日だった。

「かけられる言葉はなかった」と振り返る。そばで体調を気遣いながら、血圧を測ったり洗濯機の使い方を教えたり。困り事を一つ一つ解決できるよう、一緒に考えた。被災者のホストファミリー宅で荷物を引き取り、遺体が見つかった際の身元確認に必要な試料を集めるための通訳もした。

家族たちの帰国に合わせて3月上旬にオークランドに戻った。翌年には日本から現地の追悼式に参加し、そこで再会した複数の遺族と交流を続けている。

名古屋市の鈴木喜久男さん(70)は、NZの看護師資格を得るため英語を学んでいた看護師の長女陽子さん(当時31)を亡くした。陽子さんは「もっと困っている人がいる国で働きたい」と話していたという。

11年4月に開いたお別れの会などで陽子さんの友人や武田さんに「娘は31年間の人生を走り続けました。娘と志を同じくしている方は、『たすき』を受け取って走って下さい」と伝えた。

武田さんは岡山や京都の看護学校で災害看護や国際看護の授業を持っている。学生に看護師として世界でも活躍する夢や希望を持ってもらえたら、少しでも陽子さんたちの遺志を引き継げるかもしれない――。「自分も頑張らないとなと勇気づけられています」

22日は、インターネット中継などを通じて現地の追悼式にあわせて黙禱(もくとう)し、遺族と同じ時間を過ごしたいと思っている。（吉田真梨）